

(別紙 2)

論文審査結果の要旨

氏名 時本 真吾

本論文は、日本語文処理過程における作動記憶制約の関わりを実験心理学的に検討したもので、全5章から構成されている。

第1章では、本論で作動記憶容量の個人差評価に用いる日本語版リーディングスパンテストを解説し、統語解析モデルについての基本的想定を述べると共に、材料とする再解析文と不連続依存文を概観している。まず、作動記憶容量の大きい話者の方が小さい話者よりも言語処理が効率的だとする通説を紹介し、その根拠である実験結果の解釈の問題点を指摘すると共に、高次の認知処理を伴う再解析文が文処理の効率性を議論する上で適切な材料であることを論じている。文内で隣接しない語が強い意味的結びつきを持つ不連続依存については、不連続依存の可否を作動記憶制約に還元する近年の試みを批判的に紹介している。

第2章では、文処理の効率性を考察するために、語彙的・統語的再解析の両者を含む日本語再解析文を実験参加者ペースで視覚呈示する実験（実験1）を実施し、作動記憶容量が大きい話者は、小さい話者よりも再解析文を正確に理解するが、読文時間が長い事を示す結果を得た。これは作動記憶容量の大きい話者では言語処理が正確かつ高速だとする通説とは異なり、さらに、各話者の作動記憶容量の大小に応じた処理資源の配分機序が存在する可能性を示唆するものである。

第3章では、語彙的再解析を含まず統語的再解析のみを含む日本語文を文節毎に視覚提示する実験（実験2）を行い、語彙的再解析を含まない場合でも、前章と同様、作動記憶容量の大きな話者の文処理は小さな話者と比較して「正確だが遅い」ことを示す結果を得た。但し、文内の位置によって作動記憶容量の効果は変化し、文処理の内容によって作動記憶容量の現れは異なると主張している。

第4章では、英語では交絡してしまう作動記憶容量と統語的制約が独立して操作できるという日本語の特性を活かした実験を行い、不連続依存の可否判断に対する両要因の影響の評価を行った。まず実験3で刺激統制の確認を行い、実験4で、4種類の従属節を含む日本語文について不連続依存を操作し、実験参加者ペースの視覚呈示によって、文法性判断を問う実験を行ったところ、作動記憶容量の個人差から独立した不連続依存制約が認められた。この結果は、統語構造を反映し、かつ作動記憶制約とは独立した不連続依存制約が存在することを示唆するものである。

第5章では、全ての実験結果を総合的に考察し、作動記憶容量の効果は課題に依存する面があり、さらに詳細な検討を要するものの、文理解に関しては、基本的に、容量が大きな話者ほど正確だが遅くなる傾向が存在すると結論づけている。

作動記憶容量の個人差評価に関して、若干、恣意的な面も認められるが、本論文が多様な言語要因を巧みに統制・操作することによって、文処理と作動記憶の関係の検討に新たな側面を切り開いた意義は大きいと言えよう。以上の点から、本審査委員会は、本論文が博士（心理学）の学位を授与するのにふさわしいものであるとの結論に達した。